様式Ｆ－１９

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成　25　年　6　月　12　日現在

機関番号：32620
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2011～2012
課題番号：23792558
研究課題名（和文）　明治初期における医療の近代化－家庭と病院：看護の分化過程－
研究課題名（英文）Modernization of medical care at the beginning of the Meiji era -Homes and hospitals: the process of differentiating nursing-
研究代表者
樋野　恵子（HINO　KEIKO）
順天堂大学・医療看護学部・助教
研究者番号：30550892

研究成果の概要（和文）：明治6(1873)年初版の翻訳解剖・生理・衛生学書『初学人身窮理』の一部にある＜看病人ノ心得ベキ事＞は、1854 年版 Calvin Cutter “First Book on Anatomy, Physiology and Hygiene”の ‘Directions for Nurses’として掲載されていた。翻訳書は原著に忠実かつわかりやすい表現で翻訳され、女性の心得としての看護を提示していた。明治初期に出版された他の翻訳看護書と比較すると、男性が担うものとされていた看病人を、女性に適した仕事としていた点に大きな相違があった。しかし、どの書も実践的な内容であり、看護に必要な知識を普及させることで、日本の医療全体の質の向上を図り、国民生活の利益に結び付けたいという当時の有識者たちの意図がうかがえた。

研究成果の概要（英文）：*Kanbyonin no Kokorou beki koto*, one of the sections of *Shogaku Jinshin Kyuri* – a book on anatomy, physiology, and hygiene whose translation was first published in the 6th year of the Meiji era (1873)– had been previously published as ‘Directions for Nurses’ in the 1854 edition of Calvin Cutter’s “First Book on Anatomy, Physiology and Hygiene.” The translated work, which was both faithful to the original and translated using easy-to-understand expressions, presented nursing as knowledge for women. Compared to the other translated books on nursing published at the start of the Meiji era, which assumed that men would be responsible for nursing, its main differentiation factor was that it viewed nursing as work appropriate for women. However, each of the books had some practical content and by disseminating the knowledge that was required for nursing, their aim was to improve the quality of medical care as a whole in Japan, which would be beneficial for the lives of Japan’s citizens. This can be seen to be the goal of enlightened people of that time.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
交付決定額	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：看護学
科研費の分科・細目：看護学.基礎看護学
キーワード：医療の近代化、看護学史、翻訳書

１．研究開始当初の背景

幕末、西洋医学がポンペ(Johannes Lijdius Catharinus Pompe van Meerdervoort, 1829-1908）によって移植されるまでの間、

日本の医療形態は医師の往診を基本とし、患者の看護は家族によって自宅で行われていた。明治期に入り、西洋式病院の普及とともに、病院看護が専門領域として認識されるようになった。しかし一方では、近代学校制度の導入、欧米文化の流入によって開始された家政教育の中に、女性のたしなみとしての看護法が導入され、別の流れを作り出していくようになる。このように、医療が近代化していく中で看護が病院看護と家庭看護とに分化していったことに興味を持ち、調査を進めた結果、近代看護教育の導入期とされてきた明治 18 年以前に、既に病院看護、家庭看護のそれぞれを主題とした翻訳書が存在することがわかった。日本の近代看護史に関しては、亀山らにより詳細な研究がなされているが、看護教育前史に関しては研究の蓄積が乏しい。また、内容の一部に看護を含む翻訳家政書を扱った研究は、八幡らにより家政学領域において盛んに行われているが、看護に焦点を当てて検討しているものはない。

こうした基礎調査をふまえ、病院看護者を読者対象とした明治 10 年出版の翻訳書『看護心得』について原著との比較検討を行った。まず、文献調査によってそれまで不明とされていた原著を解明した。次に、原著と翻訳書との内容の詳細な比較により翻訳の内部過程の分析を行い、翻訳者であった医師の内面的な翻訳意図を探った。この研究成果を学位論文としてまとめたものが、「日本医史学雑誌」第 54 巻 4 号（2008）に原著として掲載され、平成 21 年度日本医史学会学術奨励賞を受賞した。

次の段階の研究史料として、家庭看護を対象とした翻訳書である明治 7 年出版の翻訳書『醫師の来る迄』に注目した。日本古来の家庭看護は養生書の中にみることができるが、『醫師の来る迄』は外科看護.内科看護.育児法.看病の心得などが西洋医学の視点で記述されていた。『醫師の来る迄』と原著との比較検討を行い、翻訳の特徴と翻訳者の意図を明らかにした後、明治初期において病院看護、家庭看護が有識者によってどのように捉えられ、普及されようとしていたのかを検討した。明治初期の有識者が目指す看護は病院と家庭それぞれに特徴があるが、両書とも極めて実学的な内容であることが明らかになった。

２．研究の目的

『初学人身窮理』は明治初期に初等教育の教科書として採用され、広く普及した翻訳解剖.生理.衛生学書である。原著者 Calvin Cutter はアメリカの開業医であり、1840-50 年代にかけて生理.衛生知識の普及活動を各地の都市で行いつつ啓蒙書を多数出版していった。これらはアメリカ国内で版を重ね、普及していったが、日本においても翻訳書が明治 6 年から明治 20 年代まで繰り返し改版、改訳された。この『初学人身窮理』の一部に看護に関する章が存在する。平成 22 年度までに検討した翻訳看護書『看護心得』『醫師の来る迄』が看護者として男性を想定していたことに対し、『初学人身窮理』では看護を女性に適した技能としている。また、医学教育は発展しているにもかかわらず、未だ看護学教育を施す施設は日本国内には皆無であることを嘆き、看病法を知らない女性は十分な教育を受けていないものと同等であると述べている。本研究では、書誌学的調査を実施して、それぞれの翻訳書ごとに原著との対応関係を明らかにするとともに、看護の部分を中心に、原著と翻訳書との比較検討を行い、それぞれの版における翻訳の特徴と変化を明らかにする。さらに、翻訳書、原著をそれぞれ日本とアメリカの時代背景の中に位置づけ、明治初期の日本における看護の移入と分化の歴史的過程の一端を明らかにする。

本研究で取り上げる『初学人身窮理』は、明治初期に初等教育の教科書として採用され、広く普及した翻訳書である。解剖学、生理学、衛生学、といった広範囲な内容の中に、看護に関する章が独立して記述されている。また、先行研究で明らかになった同時期の翻訳書とは異なり、看護の担い手として女性が適していると明記している点も興味深い。明治初期における看護書の翻訳作業は、翻訳者による意識的、無意識的な試行錯誤と工夫を必要としたことが予測される。従って、翻訳過程には当時の医療者の看護観や知識の実情が反映されているといえるが、看護学領域においては原著.翻訳書の比較検討に関する研究はほとんど行われていない。本研究は、看護学領域では未開拓の原著.翻訳書研究に着目し、原著.翻訳書間の詳細な比較検討を通して近代日本における看護の移入.分化過程を明らかにする、看護学史的に意義のあるものである。

３．研究の方法

１）史料の収集

明治 6 年初版の翻訳書『初学人身窮理』とその原著 “First Book on Analytic Anatomy, Physiology and Hygiene” を収集する。

２）翻訳書の書誌学的調査

『初学人身窮理』は明治初期に初等教育の教科書として採用され、広く普及した翻訳解剖.生理.衛生学書である。また、翻訳書は明治 6 年から明治 20 年代まで繰り返し改版,

改訂されたといわれている。日本における『初学人身窮理』の出版状況、普及状況を明らかにするため、書誌学的調査を実施する。

３）原著者と原著の出版状況の調査
医師である原著者 Calvin Cutter は同種の啓蒙書を多数出版しており、これらは 1840 年代以降、版を重ねている。『初学人身窮理』の出版、普及状況の調査で明らかになった翻訳書に対応する原著を明らかにするとともに、Calvin Cutter の著した他の啓蒙書に関しても出版状況の調査を行う。

４）翻訳書と原著との内容比較検討
原著”First Book on Analytic Anatomy, Physiology and Hygiene”の翻訳作業を経て、翻訳書『初学人身窮理』との内容の比較検討を行い、翻訳の特徴を明らかにする。

５）明治初期出版の翻訳看護書の比較
原著.翻訳書間の詳細な比較により明確化した翻訳の特徴をふまえ、刊行趣旨、読者対象を分析し、時代背景の中に位置づけることにより、翻訳者の意図を考察する。

４．研究成果
１）一次史料
使用した一次史料は以下の通りである。
① 翻訳書：松山棟庵、森下岩楠合訳『初学人身窮理』明治 6(1873)年
② 原著：Calvin Cutter, “First Book on Anatomy, Physiology and Hygiene for Grammar Schools and Families” 1854 年版

２）『初学人身窮理』＜看病人ノ心得ベキ事＞の構成
『初学人身窮理』の中の看護に関する章＜看病人ノ心得ベキ事＞は、総論、入浴、食物、空気、温度、閑静ニスベキ事という小項目で構成されていた。内容として、総論においては看病人が職分を果たすには知識と技術が必要であること、看病人は女性が適任であること、また、この章では衛生学の有用さを伝えるために看病人の職務を詳細に述べる、としていた。

３）原著 “First Book on Analytic Anatomy, Physiology and Hygiene”の原著者と出版状況
次に原著”First Book on Analytic Anatomy, Physiology and Hygiene”の原著者と出版状況について調査した。原著者 Calvin Cutter（1807－1873？）はアメリカの外科医・陸軍将校で、多くの解剖学関連の書籍があった。その内容は初等教育用から大学教育用まで、対象者に応じた解剖・生理・衛生学書を出版していた。今回の原著は 1840 年の初版以降、非常に多くの版を重ねており、多言語に翻訳された（表 1)。最近では 2007 年頃より復刻版が出版されている。

表１　翻訳された言語

出版年	言 語	国・地域
1857 年	タミル語	セイロン、南インド
1867 年	ロシア語 ブルガリア語 トルコ語	ロシア ブルガリア トルコ
1870 年	アラビア語	ベイルート
1871 年	英語	トロント
1872 年	カレン語	ラングーン
1873 年	日本語	日本

４）翻訳書と原著との内容比較
翻訳書と原著との内容比較を行った。翻訳書『初学人身窮理』＜看病人ノ心得ベキ事＞の部分は、原著中の’Directions for Nurses’として最後の章に掲載されていた。構成は一致し、原著を忠実かつわかりやすく翻訳していた。原著にある欧米の民間療法に関する一文のみを翻訳から削除していた。また、翻訳書にある清拭の順番については、原著には記載が見当たらなかった。

５）明治初期出版の翻訳看護書の比較
以上をふまえて、明治初期に出版された翻訳看護書を比較した。詳細は表２のとおりである。

６）まとめ
以上をまとめると次のとおりである。明治初期に出版され、初等教育の教科書として使用されていた翻訳解剖・生理・衛生学書『初学人身窮理』の看病人の心得を示した章は、原著に忠実かつわかりやすい表現で翻訳されていた。看病人は女性に適しているとし、女性の心得としての看護を提示していた。また、看護学教育の停滞を嘆き、初等教育で看病法を教授することでその不足を補おうとしていた。明治初期に翻訳された他の翻訳看護書と比較すると、男性が担うものとされていた看病人を、女性に適した仕事としていた点に大きな相違があった。しかしどの書も平易な表現かつ実践的な内容であり、看護に必要な知識を普及させることで、日本の医療全体の質の向上を図り、国民生活の利益に結び

付けたいという当時の有識者たちの意図がうかがえた。

今後の研究内容としては、江戸後期に出版された養生書にある日本古来の看護法についての調査を行い、日本とアメリカ、イギリスの時代背景について分析、検討する。また、同時期に出版された翻訳看護書に関してさらなる調査、分析を行う。

表２　明治初期出版の翻訳看護書の比較

	初等教科書『初学人身窮理』明治6年	家庭看護書『醫師の来る迄』明治7年	病院看護書『看護心得』明治10年
読者対象	初等教育を受ける幼童（「看病人ノ心得ベキ事」の章は主に女性）	国民一般、特に一家の主人;男性	病院で看護を担う看病人;男性
刊行目的	・女性の心得としての看病法の提示 ・看病人教育の停滞を初等教育で補うため	・医師到着までに実施する救急法、処置に関する情報提供 ・家庭での早期発見、対処の重要性の強調	・病室の管理に関する情報提供 ・看護領域の重要性の強調
翻訳の特徴	忠実かつわかりやすい表現	段落ごとの要約	取捨選択と補足
翻訳者の意図	基礎知識としての西洋医学の享受	一般国民の教養の拡大、向上	医療の質の向上

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計１件）

１．<u>樋野恵子</u>：明治初期における翻訳初等教科書にみる看護、第 26 回日本看護歴史学会学術集会（広尾）、日本看護歴史学会第 26 回学術集会講演集、39-40、2012

６．研究組織
(1)研究代表者
樋野　恵子　（ HINO KEIKO ）
順天堂大学.医療看護学部. 助教
研究者番号：30550892